

農業の力で地域に活気を ～多様な雇用と魅力の ある町を目指して～



薮下 祥大 (やぶした よしひろ)

1998年生まれ、北海道札幌市出身。大学時代を群馬県高崎市で過ごす。卒業後はフリーターをしながら自主的に音楽制作活動を3年ほど続ける。自分の好きなことを追求してきた中で「もっと必要とされていること、求められていることをしたい」と考えるようになり、2024年8月、深川市地域おこし協力隊に着任。

【今、求められていることは何か？】

食料問題、環境問題、都市への人口集中、少子高齢化、ストレス社会など、日本が抱える問題は数多くあります。一方で、農業が持つ多面的機能には、食料保障、環境保全、地域文化の継承、保健休養などがあり、また農村の活気は地方創生の原動力でもあります。全国の農村が農業をはじめ多様な事業を起こすことで、最初に挙げた社会課題を根本から解決し、日本全体の活力を取り戻すことが、国が掲げる「地方創生2.0」の目指すところ です。

深川市の地域おこし協力隊は、農業はもちろん、産地であるリンゴを使ったシードルの製造販売、有害鳥獣の駆除や食肉加工業、地域のプロモーションなど、

実に多様なミッションが展開されており、経歴もさまざまな隊員たちが日々活動しています。私もその一員として地域の振興に貢献できたらという思いから、去年の8月に農業支援員を志望し、キュウリの栽培をしながら技術や知識を高める研修を受けさせていただいています。

【なぜ、深川だったのか？】

新規に農業を始めるうえで、産地として流通体制が整っている品目を選んで作ることは非常に重要です。深川市は道内有数の米どころであり、リンゴの名産地であり、全国二位のそばの産地であり、花卉の一大産地であり、キュウリなどの施設野菜から肉牛などの畜産まで盛んです。多くの可能性があることに魅力を感じたのと、これだけの選択肢があれば自分に合った作物を見つけられるだろう、という考えもあって私は深川市を選びました。

以前は札幌に住んでいましたが、生活の利便性もさほど変わりませんし、都会に疲れ気味だった私としてはむしろ、のどかな自然がそばにあり、それでいて気軽に入れるカフェやスナックがたくさんあるというのは、とても贅沢に感じます。店に楽器を備え付けてライブイベントをしたり、バーカウンターを舞台に演劇をしたりなど、芸術や表現活動が活発な町でもあります。地理的にも、石狩川の豊かな水源と肥沃な土壤に恵まれ、さらに都心や空港へのアクセスも良いという好条件です。人や自然とのつながりを感じながら、より人間らしい暮らしをしているという実感を持てるようになりました。



深川市内から撮影したカムイスキークロス

【地域おこし協力隊「農業支援員」の活動と実際】

次世代の農業の担い手を確保、育成することを目的とした協力隊の募集は多くの自治体であります。その受け入れ体制はさまざまで、夫婦での応募を条件とする場合や、採用後の待遇などにも少しずつ違いがあります。深川市の場合は特段の応募要件はなく、家賃補助や車両の貸与など、手厚い対応がとられています。採用後は市とJA、そして深川振興公社の三社による共同出資で設立された農業生産法人「株式会社深川未来ファーム」にて、実際に作物を育てて出荷するまでの一連の作業を、OJT※の要領で仕事として行うほか、研修生を受け入れてくださる農家さんの手伝いをしながら技術、知識を身に付けていきます。農閑期である冬の間は栽培技術や農業経営について学ぶセミナーや環境問題に関するフォーラムなど座学での研修も豊富に用意されており、未経験からでも十分に実力をつけられる環境が整えられています。このような研修や実習を通して得られるいろいろな人たちとのつながりもまた貴重であり、自分次第でこの三年間は大きな財産になります。

技術面以外で必要なこととして、農地や機械設備等の取得がありますが、市外からの新規参入者はここで苦勞することが多いかと思います。当然のことながら、農地はお金さえ払えば売ってもらえるというものではありません。長年苦勞して管理してきた自分の土地を手放して譲り渡すのですから、それ相応の信頼を置ける相手に任せたいと考えるのが普通であり、協力隊として都市部から移住してくる場合はまずその信頼関係を築くことから始めなければなりません。ここでいかに深く、そして密にコミュニケーションをとり、地域の未来を担う農業者として認めてもらえるかが、その後の営農を順調に進めていくうえで大変重要なことです。その意味でこの三年間は、地域に試される期間でもあります。



(株) 深川未来ファームで飼育されている養豚

【深川で「暮らす」から「暮らしてもらう」へ】

最初の章でも述べた通り、私は農業を通して地域の振興に貢献したいという最終的な目標を持っています。深川市は全道で二番目のキュウリの産地ですが、この作物は収穫作業が大変な分、収益性も比較的高く、単品目で市場出荷するだけでもある程度の所得を確保できますし、これにより地域の農業を守るという重要な意味を果たすこともできます。まずは農家として経営基盤を安定させることが、私のやるべきことでもあります。

しかし農業には、それ以上の多くの可能性があります。第一に、農業は「ものづくり」であることです。普段私たちがスーパーで目にしている作物たちは、一般的な需要に合わせて規格化された商品ですが、道の駅など出荷規格のない直売所では、生産者たちが自由な発想で面白いものや珍しいものを販売していることがよくあります。例えばアスパラガスには4色のバリエーションがありますが、これら一揃いをパッケージにして販売することで消費者の興味を惹くなどの工夫が考えられます。また、農場は作物を生産するためだけの場所ではなく、観光農園として来訪者に開放するという使い方もできます。イチゴ狩りやサクランボ狩りなどはよく聞きますが、自分で獲った作物をその場で加工して提供することで、より体験として面白いものにもできます。このように、農村地域としての強みを生かして、ここにしかない体験や魅力を創造できたらと思っています。

さらに農業は、都市部にはない雇用を生み出します。「田園回帰」とは、都会生まれ都会育ちの若者が農村に新たな価値を見出し、定住願望を持つようになっていく流れを示す言葉ですが、これは農林水産省の実施する調査でもデータとして表れている傾向です。このような層に農業を中心とした多様な雇用を提供する事業ができれば、深川に定住することへの一助となることができます。農業の力で地域に活気をもたらし、そしてその潮流が全国で起こり、この国の活気につながるというのが私の願いです。

※ OJT (On the Job Training)
日常の業務に付きながらの職業教育。